様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３４５０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０１９１

研究課題名（和文）インド映画における女性性の表象～映像学・映画製作論的研究～

研究課題名（英文）From the Mother India to an Urban Love Romance Heroin, Feminist Representation in Indian Films

研究代表者
赤井　敏夫（Akai, Toshio）

神戸学院大学・人文学部・教授

研究者番号：００１９２８７３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は①「母なるインド」の図像が占める映画史位置の解明、②女性ヒーロー映画の分析、③現役女優への聞き取り調査の３つを軸に、女性表象の映像表現が変化するインド社会の中で映画観衆にどのように受容されているかを明確化することを目的とした。①と②からは捗々しい研究成果が得られなかったが、③においては以下のような重要な知見を得ることができた。即ち、一定の女優は男性優位が強固な定型の中で従属的ではなく女性を表現することに意識的であること、セレブとしての立場から社会運動に積極的に参与していること、それらの活動の中に新たなタイプの「女性中心映画」が生み出される可能性が胚胎していることである。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research was to make obvious how gender difference is visually represented in Indian Cinema, and how the shift of the representation is competed with Indian audiences' appreciation of womanhood as a significant part of workforce in India’s modernizing society. My research employed three approaches; historical analysis in film study, the review of "female-centering films," and the interviews with the heroine actresses, and those of other departments of the film industry. The first two approaches were not productive as expected. However, the third one was fertile in discovering that certain actresses, bestowed with acute sense of the female representation, are conscious of social incidents such as the Delhi rape case in 2012, and their social awareness makes them a leading figure in several liberal movements, thereby the creation of an unborn female-centering film, entirely different from an existing one in style and manner, is being motivated in their minds.

研究分野：映像学

キーワード：インド映画　南アジア　ジェンダー格差　神話　スターシステム　セレブリティ

１．研究開始当初の背景

インドの劇映画は長らくヒーロー中心の男性支配的な演出方法を採用してきた。この強固な定式の中では、ヒロインはヒーローの男性性を際立たせるための装飾品として消費されるほかはなかった。したがって女優の俳優生命は男優のそれと比較してはるかに短くなる。劇映画に代表される大衆向芸能には保守的な道徳感が反映されがちであり、その意味で銀幕上での性差配分は独立以前から続く伝統的社会観を反映していると想定できる。

しかしここ数十年の急速な経済発展によってインド社会も変質を遂げつつある。都市化が進む社会の中では IT が経済を牽引する産業となり、旧来の性差配分が意味をなさない労働環境が発生した。こうした社会的変化が映画製作において何らかの影響を与えずにはおれないことは十分に予想できる。変化が生じているとすればそれは劇映画の性差表現のどの点に顕著に現れているのかを分析し、近代化が非西洋社会の性差分担にもたらす影響を考察しようとするのが、本研究の発想の原点であった。

２．研究の目的

本研究は、建国以降現在に至るまでのインド劇映画を対象に、そこで表現される性差分担の変化を分析し、それによって劇映画に反映されているはずの保守的な集合的道徳意識がどのような変更にさらされているかを読み取ることを目的とした。そもそも「女性の社会進出」はどれほど男性と労働環境を共有しているかという尺度で計ることができるが、本研究で目的とするのは、映画観客に代表される一般大衆がどこまで性差分担の均質を容認するかを計測しようとするものである。こうした計測の妥当性は以下のような前提的考察に基づいて導き出されたものである。

社会における性差分担は、背景をなす文化によって規定する標準が異なってくるが、非西洋的社会が近代化する過程で大きな変更を余儀なくされることは間違いない。なぜならそうした社会では近代化すること自体が自発的な選択によるものではなく、多分に外的圧力から強制された結果である場合がほとんどだからである。ここに激しい緊張関係が発生することは間違いない。

インド社会は独立以来、カーストで区分される伝統社会を大枠で維持して、政府による民間への介入を最小限にとどめようとしてきた。そうした環境では、国家的な主導性が欠けている分だけ、近代化を推進しようとする意志と旧来の価値観を守ろうとする反発が、激しい緊張関係を生み出す。そしてそれは大衆的な道徳観を反映する娯楽、ことに最大のエンターテイメント・メディアである劇映画において、正確に反映されているはずである。なぜなら映画は大衆が是認する最大公約数的価値観を常に映像化して提出してきたからこそ、表現媒体として常に支配的な地位を保つことができたからである。

本研究によって得られた知見をモデル化できれば、インドにおける近代化という文化現象の特異性を剔出できると同時に、他の（日本をふくむ）非西洋文化圏での相同性も比較対照できるため、研究的意義は大きいものと想定した。

３．研究の方法

本研究は以下の３つの調査方法で行った。

①映画史的分析

独立前から独立後にかけて、ナショナリズム発揚のために援用された「母なるインド」（The Mother India）という図像的女性表象が、インド劇映画においてどのように映像表現の中で利用されたかを、映画史的観点から調査する。これには映画史のみならず、独立運動研究やフェミニズム研究など、広範な関連分野の先行研究業績を参照の対象とする。

②女性ヒーロー映画の調査

インドの劇映画ではカンナダ語映画界に女優をヒーローとするジャンルが存在する。これはきわめて特殊な分野であり、隣接する近縁映画界にも類型を見いだすことができない。そこでこの分野での女性ヒーローのドラマトゥルギー上の役割と、またそれに特化した映像表現を分析することで、女性表象がどのように映像化されているのか、すなわち、単なる男性ヒーローの代替物にすぎないのか、もしくはそこに何らかの積極的価値が付加されているのかを考察する。

③現役女優へのインタビュー調査

劇映画で演出上の定式となっている性差分担を実際に映画界で活動している女優はどのように評価しているのかを、現役女優へのインタビューから調査する。現役ヒロインから性格俳優まで、広い範囲から調査の対象を抽出し、収集する情報に偏差が生じないよう配慮を心がけた。

以上のような研究方針に基づき、研究期間内に３回渡印し、S. V. Srinivas、Suresh Chabria などの現地研究者と意見交換を行うと同時に、俳優、プロデューサを含めた映画関係者から広く聞き取り調査を行った。

４．研究成果

研究成果を研究方法別に分けて記述し、末尾に概括を述べる。

①映画史的分析には Sumathi

Ramaswamy (2011)等の先行研究が示す情報以外に作業仮説を構築できるほどの新たな知見を得ることができなかった。インド女性の表象は「女神として崇め婢女として賤む」という二極に分裂していることは夙に指摘されるところだが、この二極化が芸術表現の分野だけではなく、あまりに広く一般社会に甘受されているため、それがかえって劇映画に特化した分析を難しくしているというのが最大の理由である。

ただし劇映画においては清純派と妖婦の二項対立で演出される女性表象が、慈愛と破壊という女神の神話的機能にまで遡及することが可能であり、それは劇映画の一ジャンルである神話映画において可視的に映像化されているのではないかという従来考えていた仮説を補強する資料をある程度確保することができた。この方面の研究を続行することは今後の課題である。

②女性ヒーロー映画の調査に関しては捗々しい進展がなかった。研究が不活性に終わった理由は主に、関連する研究がほぼ皆無で、該当する作品はあらかた鑑賞できたものの、そこから導き出した共通項で、何らかの仮説を構築するまでに至らなかったことによる。おそらくこのジャンルは特殊な観客層を対象としたものであり、その要素を普遍化してインドの劇映画全体に合致させることじたいが難しいものなのであったろう。これに関してはインド映画全体から見るよりは、他の文化圏の男装演劇（例えば日本の女剣劇）などと比較対照した方が、より実り多い研究結果が得られるのではあるまいか。

ただし本研究の途上で「Baahubali」(2015)の記録的ヒットに伴ってにわかに時代劇のリバイバルが起こり、同作品のヒロインを演じた Anushka Shetty が主演する女性ヒーロー時代劇「Rudhramadevi」(2015）が公開された。2015 年に Anushka Shetty 自身にインタビューを行い、時代劇リバイバルと演出上の性差配分の変化に関して直接意見を聞くことができたことは大きな収穫であった。

③現役女優へのインタビュー調査は本研究でもっとも大きな成果の得られた部門である。研究開始当初から、(a)現役のヒロインと(b)かつてのヒロインで長く映画業界の推移を体験している性格俳優、の２つの異なったタイプの女優から情報収拾することが必要と考えていたが、(a)の代表として Nithya Menen を、また(b)として Rohini を、ともにゲストスピーカとして招聘し、本務校にて鼎談を中心とした国際シンポジウムを開催することができた。

本シンポジウムから確認できたことは、現役女優の意識は現実社会で発生する様々な事象、例えば 2012 年にデリーで起こったレイプ殺人事件であるいわゆるニルバヤ事件のような、インド社会に深刻な影響を与えた社会現象に強く呼応していることである。女優のセレブリティとしての特権的立場は、彼女らが女性権利確保のための社会運動で主導的な役割を果たすことを可能としている。またそのことが、女優みずからが演ずる映像上の役割に対する意識を先鋭化させて、女性ヒーロー映画のような単なる男性ヒーローの代替ではない、女性性の表現を前景化した新しい劇映画の創造に向けての動機づけとなっていることも確認できた。

本シンポジウムには研究者のみならず在日印僑も多数参加し、鼎談後にも活発な質疑応答がなされたことも、伝統的劇映画の性差分配的演出方法がインド人にどのように受容されているかに関する知見を広げるのに役立った。

本シンポジウムの内容は鼎談と質疑応答を抜粋したものを中心に文字起こしを行い、、サイトを構築し日英両バージョンにてオンラインで公開している。URL は下記〔ホームページ等〕の項目を参照のこと。

研究期間中にはこれ以外にも上記②の項目で触れた Anushka や、「Baahubali」のプロデューサである Yarlagadda Shobu 等とも接触して、貴重な情報を収集することができた。

以上の成果を概括するならば次のようになる。すなわち、インドの劇映画で映像表現されている性差配分は、現実社会で発生している様々な事象に間接的に呼応して常に微妙な変位を示しており、一見するほどには保守的道徳律を一面的に補強するよう機能しているとは限らない。一部の女優は演出上の性差に関して深く意識しており、男性中心的な旧来の映像表現定型の中にとどまりながら、いかにしてそれを変革してゆくかを探っており、またその営為がスクリーン外部の社会的事象に十分な影響を及ぼしうることを意識している。これらの知見はインド劇映画を分析するにあたって旧来にない視座を提供するすることができると考える。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① Toshio Akai, Naoko Ataka, “Still the Land of Gold?: a Study of Japan’s Reception of Indian Cinema and the Predominance of Regional Films in Creating a Mass Market,”『人間文化』査読有、41 号、41-52 頁、2017 年。

〔学会発表〕（3 件）

①Toshio Akai, “Mira and Paul Richard in Japan: Why is Their Mystery Still Unsolved?” The Cosmic Movement: Origins, Contexts and Impact, Research Workshop of the Israeli Science Foundation and the

Goldstein-Goren International/Center for Jewish Thought, Ben-Gurion University of the Negev, Israel、2017 年 3 月 22 日。
②Toshio Akai, "The International Lodge Reconsidered; Theosophical Network and its Impact on Japanese Interbellum Modernity," Enchanted Modernities, 4th International Conference: Texts and Contexts of Modern Enchantment, Columbia University, USA、2015 年 10 月 10 日。
③赤井敏夫、「インド映画における女性映画人の役割」日本映像学会関西支部第 75 回研究会、近畿大学（大阪府）、2015 年 5 月 31 日。

〔その他〕
ホームページ等
http://indian-actress.org

６．研究組織
(1)研究代表者
赤井　敏夫（Akai, Toshio）
神戸学院大学人文学部教授
研究者番号：00192873